

討論下

いま原子力問題をどう考えるか——先週の高木仁三郎さん、原子力資料情報室代表、反対派に続き、今回は日本原子力産業会議専務理事の森一久さんにインタビューした。同会議の中心的存在として三十余年にわたり原子力とかわって来た森さんは「私たちはまだ原子力利用の入り口に過ぎない。人類の英知が見つけたこの貴重なエネルギーを大切に育て、いままでも通り安全にじっくり使っていく必要があります」と語った。

聞き手 清水洋一・科学部長

——まず、最近の反原発運動をどう思いますか。

森さん 原子力開発に反対意見があること自体は悪いことじゃない。厳しい目があるからこそ今まで慎重にやっていたことが、ということがあって抱いている層もかなりある、りますから。ただ、最近の反

対運動は、消費地の特主婦に移ってきたという違いがあるんですけど、そういう人たちが訴えるやり方が扇動的に過ぎるのではないかと。あすにも重大事故が起こるとか、正の不安は外国の事故によるもの月がとしが最後とか。そういう一方的な情報で反対派になられた人が大分おられる

日本原子力産業会議専務理事 森 一久さん



撮影・岩本 準一

森 一久氏(もり・かずひさ)一九二六年広島市生まれ。京都大学理学部卒。中央公論社、電源開発株式会社を経て五六年日本原子力産業会議理事。七八年同専務理事。核物質管理センター理事、日本原子力文化振興財団副理事長、動力炉・核燃料開発事業団参与などを兼任。通産省総合エネルギー調査会、原子力安全委員会、原子力委員会などの各専門委員を務める。

原発、長い目では「必要」

あるんです。それを、これかや石炭使ら定着させていくことが大切、また石油、なんであって、当面、原子力して貴重になってもやれるとかいう問題じゃないですよ。

——長期的には原子力は欠かせない、と。

森さん だって、石油、石炭はいくらでもある、などと言っている人たちが、百年も先に石油が自由に使えるとは思ってないでしょう。いままで何百万年か生きてきた人類が、あと何万年も生きていくとしたら、やはりこれだけ

心は国民と共に日本の原子力関係者も強く持っている。これは大変貴重な、原子力開発のいわば原点なんです。それを一部の人利用しているのは許せない気がする。でも、こんな影響されるとは、意外でした。もっと日本の原子力を信頼し理解してもらって、いたと思っただけです。

日本は世界に誇れる状況ですが、今後とも慢心することがあってはならない、と思います。

——いまのような状況で、原子力開発は必要あるべきだと考えますか。

森さん いま、特に日本ではエネルギーがいろんな意味で潤沢になってきて、恵まれ

た状況にありますね、円は高いうことは非常に大事です。核分裂の発見は一九三八年。まだ約五十年しかたっていない。そういう新しいエネルギーは使えるし、高速炉も含めれば数万年以上使える可能性はあるわけですから。それに途上国だって、これから経済発展をしたいし、それには石油

地球上に豊富に存在しているウランのエネルギーに取り組んでいかねば……。原子力はいまの使い方でも何百年は使えるし、高速炉も含めれば数万年以上使える可能性はあるわけですから。それに途上国だって、これから経済発展をしたいし、それには石油

安全運転の宝結を

や石炭使いたいでしょ、
また石油、石炭は炭素原料と
して貴重なものです。これら
化石燃料には酸性雨、温室効

安全運転の実績を

原子力利用、まだ入り口

果などの環境問題もありま
す。その中で日本は経済
力にまかせて石油は平気で買
える、あとは知ったこっちゃ
ない、というところが許される



のでしょうか。

——日本はこれまで急いで
原子力開発を進めてきたよう
に思います。この辺で立ち止
まってみたらどうですか。

森さん 常に立ち止まって

考える、という謙虚さは必要
でしょう。しかし、原子力の
ような大事なものを預かって
いる者としては、反対を押し
のけてというんじゃないかと、
理解を得ながら努力していく
のは当然じゃないか、と思い
ますね。

——電力会社の側に、原子
力への魅力が薄れてきた、と
いうことはありますか。最
近の厳しい情勢やコスト面の
ことで……。

森さん いまのところそれ
はありません。石油に対する
危機感はかなり持っています
し、安定供給という点では、

なんといっても原子力は優れ
たエネルギーです。ウラン濃
縮とか再処理、さらにウラン
資源のことなど、まだ足固め
が必要だと思いますけど
ね。

——スウェーデン、イタリ
アのように国民投票で脱原発
を決めた国もありますが……。

森さん そうなんですけれ
ども、スウェーデンでも昨年
末の世論調査では、原子力を
捨てない方がいいんじゃない
かという世論が五割近くに
なってきた。ヨーロッパで脱原
子力といっている国をみても
結局、ソ連やフランスの原子
力発電の電気を使って間に合
わせようとしているケースが
多い、というんですね。

3面に続く

1面から続く

—原発で一番心配なのは
事故ですが。

森さん それは十分防げる
と思います、日本ではいま
の原子炉（軽水炉）の性質、
厳密な品質管理、運転などか
らいってね。

—人間はとんでもないミ
スを犯すことが……。
森さん だけど、米ンで起



◆森 一久さんに聞く◆

きた二つの事故、スリーマイ
ルアイランド（TMI）とチ
ェルノブイリは、ミスとい
うのはちよつと違うのです。
TMIは礼付きの発電所だっ
た。ボタボタ水が漏れてるこ
とが計器に出ている。なのに
まだ基準の半分だ、もっと頑
張れっていうようなことでそ
のままにしておく。そのうち

に事故が起きてECCS（緊
急炉心冷却装置）が働く、水
がだんだん増えていく、と、
それを止めちゃう。ケタ違い
の事故を起こしたチェルノフ

イリの場合も、六つの規則違
反があったと説明されている
けど、これらは相手が超大国
だから国際会議などの礼儀正
しい言い方だね。車の運転に
たとえると、ブレーキを全部
取り外してアクセルをいっぱ
い踏むようなことをやった。
常識で言う規則違反とは全然

原子力
行政

ガラス張りも必要

違ふ。そんな点で、誤解を与
えていると思います。
—事故の可能性はゼロで
はないでしょう？

森さん 可能性はゼロとは
言いません。しかし、日本
がいまままでのような高い安全
性の努力を続けることで、ゼ
ロにできると思います。と同
時に、そのことは別に、事
故を想定した防災対策、避難
訓練もやってくるんです。だか
ら、事故の可能性は「ゼロで
はない」ということを電力会

社も言え、というのは酷です
よ。いまの状況では、いろいろ
の揚げ足を取られます。現に

原子力産業会議が三十年前、
原子力損害賠償制度をつくる
ときの資料として、原子炉の
放射能が散らばった仮定し
て、ここまで広がるかを計算し
たことがあるんですが、それ
だって「彼らは事故が起きて
もいいと思ってるわけだ。事
前に事故の解析・評価をする
なんてことは原子力が最初

でほかではやってなかった。
まじめな取り組みをやってド
ロをかぶってるんです、原
明」としてもまだ未熟なので

中央公聴会開催を
二回に
わたる
「原子力
インタビ
ュー」で
「原子力
インタビ
ュー」で
「原子力
インタビ
ュー」で

力力は。原子力関係者は一
種の新人類かも知れません
ね。

—新人類？
森さん そうです。開発の
最初から廃棄物の処分法を開
けっ広げに研究する。放射線
についても、どんなに少量で
も書があると仮定して基準を
つくる。専門家は「将来がん
患者が何人増えるかも」など
と平気で言う。こんなことが
みな原子力の危険の「証（あ
かし）」のように引用される

のです。この新人類はある意
味でスキだらけ。原子力は「文
明」としてもまだ未熟なので

不公平が生じる。それを避
け、一回目の記事が出る前
に二回目のインタビューを
行った。二人の話があまり
かみ合っていないのはこんな
事情による。高木さんは意
気盛んだった。反対運動が
高まっているためだろう。
森さんは原子力開発の使命
を熱く語っていた。
原子力に対する「イエス」

しょうか。
—反対派は原子力行政に
も不信感を持っています。もっ
とガラス張りにするべきでは
ないですか。

森さん そうですね。原子
力安全委員会なんかかなり
安全に関して厳しい注文をつ
け、手直しもさせている。そ
の努力が国民に見えない。電
力会社が自発的に変更した、
という体裁を整えるのが日本
の行政の体質です。もっとガ
ラス張りにはするとは考えた
方がいい。米国のNRC（原
子力規制委員会）のように大
部分が弁護士で、規制に合っ
ているかどうかをにらんでいる
だけ、文句がきたら公聴会、
その結果待ち、という行き方
がいいかどうかは問題だと思
います。

「ノー」は結局、その人の
価値観、生き方の選択で決
まることだろうが、その前
提となる正しい情報を国民
は十分には得ていないように
思う。その意味で、両派の
人たちが公開の場でじっくり
討論する中央公聴会を開
催することが、非常に大切
ではないかと二回のインタ
ビューで改めて感じた。

「ノー」は結局、その人の
価値観、生き方の選択で決
まることだろうが、その前
提となる正しい情報を国民
は十分には得ていないように
思う。その意味で、両派の
人たちが公開の場でじっくり
討論する中央公聴会を開
催することが、非常に大切
ではないかと二回のインタ
ビューで改めて感じた。